

世界史 創価大学一般入試 B・C 学習アドバイス (傾向と対策)

■一般入試 B (2月3日実施分)

出題傾向分析

1. 試験の形式

日程	一般入試 B (2月3日実施)			形式	マーク式
大問数	4 題	小問数	40 問 (各大問に 10 問)	試験時間	60 分

問題形式	小問数	内容など
語句選択 4 択	28	空欄補充が 7 問、「適切ではないもの」の選択が 1 問
組み合わせ選択 4 択	3	国の組み合わせ、人物・著作の組み合わせが出題された。
文章正誤選択 4 択	9	すべて正文選択であった。

語句選択は、下線部に関する一問一答とリード文中の空欄補充であった。組み合わせ選択は、2 つの国の組み合わせ (2 問 6、4 問 3) と、人物・著作の組み合わせとして「適切ではないもの」を選択する問題 (2 問 2) であった。文章正誤選択は、ほとんどが 4 つの文章から正文を選択するものであったが、中書省の役割 (1 問 6) や 15 世紀に起こった出来事 (2 問 1) も問われた。全体を通して年号を問う問題は出題されなかった。

2. 出題内容

大問	出題内容	時代	地域
1	14 世紀の危機	近世	東アジア
2	ハプスブルク家とフランス王家の対立	中世～近世	ヨーロッパ
3	ヨーロッパ諸国の対外進出	近世	ヨーロッパ
4	1848 年革命から帝国主義へ	近代	ヨーロッパ

リード文は、概ね教科書に準拠したオーソドックスな内容となっている。本日程の出題範囲は、東洋史が 1 題・西洋史が 3 題出題されており、西洋史の比重がやや大きい。時代についても、古代・現代からの出題がなく、すべて中世～近代におさまっている。難易度は、全て標準レベルである。3 では、貿易や産出される品目に関する問題が 5 問出題されている。また、全体を通して文化史は 3 問出題されている。これらは盲点となりやすい箇所だが、問われている内容は教科書レベルの平易なものである。

学習アドバイス

創価大学の世界史は、難問とされるような細かい事項や奇抜な問題形式で問われることはなく、標準的なレベルの良問題で構成されている。このような問題に対応するためには、教科書をベースとした丁寧な学習が不可欠である。問題の大半は語句を問う問題であるため、語句暗記もおろそかにはできない。語句暗記は、英語や古文の単語暗記のように日常的

な学習が必要である。一問一答問題集などを用いて、日常的に空き時間などで知識の確認を行う習慣を身につけよう。一方で、全体の約 4 分の 1 を占める文章正誤選択に対応するには、単純な語句暗記だけでなく、各事項の背景や因果関係、語句の内容理解が求められる。そのためには、教科書をただ漫然と読むのではなく、自作のノートでまとめ直したり、問題集に取り組んで間違えた問題を中心に教科書で内容や周辺知識を再確認することが大切である。問題集は難問を取り扱うようなハイレベルなものを用いるよりも、むしろ標準的な内容を全範囲まんべんなく確認できるようなものを使用した方がよい。語句暗記か教科書の通読のどちらかに偏った勉強方法ではなく、両方にバランスよく取り組むことが創価大学合格への正しい道のりである。

また、本日程では出題されていないが、他の日程では年号や年表が問われることもあるので、常に歴史の流れを意識しながら、重要な事項は年号も同時に覚えるようにした方がよい。出題範囲も年度や日程によっては偏りがあるものの、どの範囲から出題されるかは明確な法則があるわけではなく、1 つの大問の中でさまざまな地域・時代が扱われることもある。そのため、出題される範囲のヤマをはるのではなく、教科書の初めから最後まで丁寧に取り組まなければならない。

■一般入試 C（2 月 7 日実施）

出題傾向分析

1. 試験の形式

日程	一般入試 C（2 月 7 日実施）			形式	マーク式
大問数	4 題	小問数	40 問（各大問に 10 問）	試験時間	60 分
問題形式		小問数	内容など		
語句選択 4 択		27	リード文中の空欄補充が 2 問出題された。		
組み合わせ選択 4 択		3	国家、地域－王朝、人物の組み合わせが出題された。		
文章正誤選択 4 択		8	正文選択 7 問、正誤の組み合わせ選択 1 問であった。		
年表・年号選択 4 択		2	年表問題 1 問、年号選択問題 1 問であった。		

一般入試 B と同様の問題数・制限時間であった。語句選択は、下線部に関する一問一答とリード文中の空欄補充であった。組み合わせ選択は、国家－国家（**1** 問 5）、地域－王朝（**2** 問 7）、人物－人物の組み合わせ（**3** 問 1）であった。文章正誤選択は、2 文の正誤の組み合わせを選択する問題（**4** 問 1）が出題された。一般入試 B では出題されなかった年表・年号問題も出題された。

2. 出題内容

大問	出題内容	時代	地域
1	古代オリエント世界	古代～中世	西アジア・ヨーロッパ
2	中国北方民族史	古代～近世	東アジア
3	キリスト教の宗派	古代～中世	ヨーロッパ
4	中央アジアにおける英露対立	近代	西アジア・ヨーロッパ

一般入試Bと同様にリード文は、教科書に準拠したオーソドックスな内容となっている。本日程の出題範囲は、東洋史3題（西アジア2題・東アジア1題）、西洋史3題とバランスよく出題されている。特に1と4は、1つの大問の中に東洋史と西洋史が混在している。時代も、古代～近代まで広範囲にわたり出題されているが、本日程でも現代は出題されなかった。難易度は、全て標準レベルである。一般入試Bにはなかった、年表・年号問題と正誤の組み合わせ選択が出題されているが、この問題形式はセンター試験と同様なので、多くの受験生にとっては不慣れなものではなかったと思われる。また、全ての問題を通じてダミーとなる選択肢も含めて教科書レベルを超える内容はみられなかった。

学習アドバイス

本日程も、一般入試Bと同様に標準レベルの良問題によって構成されている。出題範囲では、一般入試Bに比べ広範囲にわたって出題されており、特定の地域や時代に偏った学習しかできていなかった受験生は苦戦をしいられたと思われる。創価大学合格を目指すうえで最も重要なことは、ヤマをはずす教科書の初めから最後まで丁寧に学習することである。両日程を通じて現代からの出題がないが、これまで現代からの出題が全くなかったわけではない。本年度の傾向から、現代からの出題がないと思い込まないように注意が必要である。

難易度の面では、前述したように、全ての問題が教科書レベルの知識によって構成されている。全体の大半を占める語句選択も、教科書に記載のあるものばかりで、文章正誤選択で問われる内容も同様である。教科書を何度も通読したうえで、暗記知識の強化を図る必要がある。知識の定着を確認するためには、一般入試Bの学習アドバイスでも述べたように、標準的な内容の問題集を用いて、間違えた問題を「なぜ解答できなかったか」自己分析したうえで、語句の暗記が不十分であると感じたのであれば一問一答問題集で暗記知識の強化を、内容理解が不十分であると感じたのであれば教科書による理解の強化に取り組んでほしい。また、本日程で出題されている年表問題は、年号の暗記ではなく歴史の流れが理解できていれば十分に解答することができる。教科書に記載されている事項を、自作ノートに簡単な年表としてまとめれば、歴史の流れを再確認しやすくなる。

できれば秋頃までには一通りの学習を進め、以降は創価大学の赤本で過去問演習にも取り組んでもらいたい。過去問演習は、問題形式に慣れることはもちろん、要求される知識のレベルを実際に感じることができる。その結果を踏まえたうえで、苦手な分野や知識が不十

分な個所をもう一度、入試直前まで追い込めば、より合格点に近づくことができる。また、創価大学は全問マーク式で、問題形式・分量ともにセンター試験に類似しているので、センター試験（共通テスト）の赤本を用いた問題演習も効果的である。